

ロボカップ ジャパンオープン 2007 大阪

2007年5月3日～5日、大阪市・インテックス大阪2号館にて、「ロボカップ ジャパンオープン 2007 大阪」が開催された。

みきお

地元・大阪勢が目立った ヒューマノイド

大阪でのロボカップというと2005年の世界大会が記憶に新しいが、その前年の2004年にはジャパンオープンが開催されており、今年が3回目の「ロボカップ@大阪」となる(ちなみに昨年、ロボカップ国際委員会本部事務局も大阪市に誘致された)。

そんな大阪の名前を冠したチームが、ロボカップ世界大会・ヒューマノイドリーグで3連覇を果たしている「Team OSAKA」だ。4連覇を目指す今年の陣容は、「VisiON 4G」と名づけられたキッズサイズ(身長300～600mm)の新型と、ジャパンオープン初となるティーンサイズ(身長800～1600mm)競技のための「Vstone810」という体制である。観客のほうもわかっており、Team OSAKAが試合をするタイミングになると、ただでさえ人の多いヒューマノイドリーグが満員御礼状態になっていた。

キッズサイズの競技は、テクニカルチャレンジと2on2。昨年からの大きな変更は、PK戦とテクニカルチャレンジの“不整地歩行”が消え、コート上に置いたボールを避けてゴールまで歩く“障害物回避”が加わったことだ。

大会前半で行われたテクニカルチャレンジは、Team OSAKAの独壇場。昨年、ゴール一歩手前で失敗していた“ドリブル”は、足踏みをしながらゆっくり進み、ボールを常に機体の近くに置く方法でクリアし、満点を獲得(完走場面はスタッフも「初めて見た」とのこと)。“パス”こそ失敗したが、“障害物回避”はスムーズにこなし、頭一つ抜けているところを見せていた。他チームでは「Darmstadt Dribblers」が“障害物回避”に成功してただけで、

“ドリブル”はチャレンジしたのが Team OSAKA だけという状態だった。

しかし、大会後半の2on2になると各チームの調整も進み、好ゲームが見られるようになってくる。特に“はじめロボット”を使う2チーム(ドイツからの遠征チーム「Darmstadt Dribblers」と、初参加の「CIT Brain & Hajime」)がいい動きを見せた。

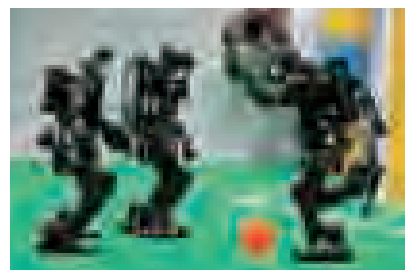
「CIT Brain & Hajime」はこれまでレスキューロボットリーグや小型リーグに参加してきた千葉工業大学林原靖男準教授が“はじめロボット”の坂本元氏、(株)ブレインズと組んだチーム。それぞれが得意分野でのノウハウを持っているだけに、始めてから半年という新造チームでありながら決勝まで進出。「Team OSAKA」を一時リードするなど、会場を沸かせた。惜しくも6-4で敗れてしまったが、出場を予定している世界大会に向けて、順調な調整が進んでいることをうかがわせた。

一方、追いかける立場の「Team OSAKA」は、新型機「VisiON 4G」が本番一週間前にギリギリできあがるなど、総監督の大和信夫氏が「毎年厳しいと言っているが、今年は間違いなく今までで一番厳しい」という日程に加えて、前日の深夜に起こったという新型CPUボードの“突然死”もあり、準備不足で会場入りしたのは間違いはない。それでも競技開始には間に

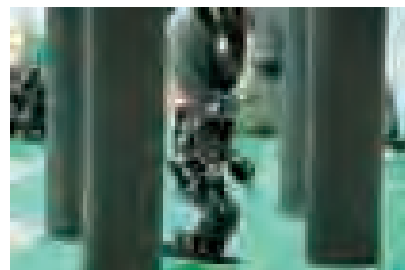


「VisiON 4G」のドリブル。大きく蹴るとボールやフィールドのゆがみが影響する可能性があるが、足踏みしながら運ぶと確実性が高い

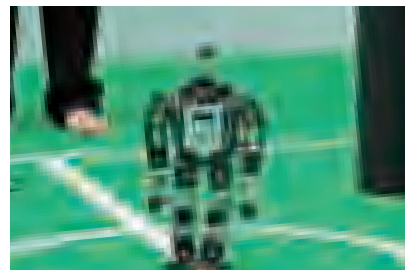
合わせ、棄権した競技はなし。昨年は新型(TRYZ)の調子が悪いときには2005年の機体(NEXTA)が出場することもあったのだが、今年はすべての競技を4Gでクリアしたのもチャンピオンチームの底力だろう。



「Darmstadt Dribblers」(中央と右)対「CIT Brain & Hajime」(左)の対戦。見た目はほとんど一緒だが、“動き”にはやはり個性が出る



障害物回避に挑む「CIT Brain & Hajime」。残念ながら完走ならず



フレームから自作した金沢工業大学「demura.net」の機体。今年は予算が厳しかったが、来年は学校からの支援が得られそうとのこと

昨年は「Team OSAKA」1チームの登録だったために競技不成立だったが、今年は「Hajime(はじめ研究所)」も登録したことで初めてジャパンオープンで開催されることになったティーンサイズ。競技はテ